しあわせ

7　月　号

信心歓喜（しんじんかんき）　慶所聞（きょうしょうもん）
乃暨一念至心（ないがいいちねんししん）者
南無（なも）不可（ふか）思議（ぎこうぶつ）光仏
頭面（ずめん）に礼（ら）したてまつれ

（『浄土和讃』四九）

本願の名号を聞き、信ずることをえてよろこび、如来の真実心をたまわった人は、「南无不可思議光仏」と、うやうやしく礼拝したてまつるがよい

（意訳）

※南无不可思議光仏…　本願の救いの超越性を表す名号。南无阿弥陀仏とおなじ。

「手を合わす母」

いよいよ一年遅れの東京オリンピック。コロナの終息が期待されたが、厳しい現実の中での開催となった。

コロナで世界が大混乱となって、世界中が助け合い協力しあう構図が出来るかと思いきや、恩着せ外交で世界への影響力を増大させている国のしたたかさには恐怖をも感じる。

そんな中の平和の祭典オリンピック開催は世界をつなぐ大イベントだ。勝っても負けても手を取り合い、抱き合って互いの健闘を讃えあえるのはスポーツだけの魅力だろう。

ところが、差別や争い貧困といった厳しい人生の現実が続くと不出生主義「生まれてこなければよかった」という悲しい思想も生まれている。

生まれてこなければ、生きる苦しみや死ぬことへの恐怖も環境破壊も戦争もないという思想。目先のことに振り回されて、わが命を喜び感動できない悲しい思想である。

法座案内

聞熏会　ー仏弟子に学ぶー

七月二十日　午後二時～
講師　内藤昭文師（本願寺派司教）

法味の会　ーご和讃のこころー

七月二十三日　午前十時～
お話　自坊住職

盆会法要

八月　九日（月）昼席・夜席
十日（火）昼席
講師　朝枝暁範師
（北広島町　本立寺住職）

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田一丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二ー四八二三

～　負けて信をとる　～

今回の一首は本願成就文といわれる大事なお経文のこころを顕わされたものであり、さわりなき救いをつげる阿弥陀さまの御名を聞き、信じよろこぶその人は、仏さまの真実心をたまわった人なのだと讃えられています。では、仏さまの真実なる心をたまわるとは、いったいどういうことなのでしょうか。

江戸時代に利井鮮妙（かがいせんみょう）という和上がおられました。和上のおられたご自坊では、毎年報恩講には通夜で法座が開かれ、夜明けまでご法義について語り合っていました。ある年の報恩講、参詣されていた一人のお坊さんが、深夜、思いつめた表情で口を開かれました。

「和上、今日こそはと思い、意を決してお参りいたしました。ご承知のように、わたしはつねづねいろんなお寺でご法義をお伝えさせていただいております。しかしまことにお恥ずかしいことですが、自分自身がどうしても、そのおみのりを頂けません。和上、どうすればわたしの信心はさだまるでしょうか…」

その方は有名な布教使だったようです。それだけに、日々おみのりをお伝えしておりながら、自分自身がその教えを素直にうなづけないことを、人知れず悩んでおられたようです。

「そなたはどのようにお伝えしておるのじゃ」

鮮妙和上は穏やかにたずねられました。

「はい、それはもう、つねづねお聞かせいただいている通りに、阿弥陀さまの名号のひとりばたらきでお浄土に生まれさせていただくのだとお伝えさせていただいております」

「それはまことに結構じゃ。まさしくご開山（かいさん）さま（親鸞さま）のおみのりだのう。そのおみのりのどこに問題があるというのじゃ」

「いえいえご開山（かいさん）さまのおみのりはまことの教えであり、どこにも問題はございません」

「ほう、ではどこに問題があるのじゃ」

「ですから、そのおみのりの通りに、わたし

自身がどうしてもうなづけないのです」

「ふむ…、そなたはご開山（かいさん）さまのおみのりにいつわりはないと思っておるわけじゃな？では、そのまことのおみのりを頂けないそなたのこころは、ほんまものか、にせものか」

「それはもちろん、わたしの心は偽物です」

瞬間的に、自分の心は偽物と答えてしまったその方に、和上はほほえんで仰いました。

「そなた偽物にそんなに力を入れずともよいではないか。偽物は横に置いておき、如来のまことを、ともに仰がせていただこうぞ」

阿弥陀さまは、無明の闇にまどう凡夫のために「南无阿弥陀仏」という名となって喚びつづけてくださっています。さわりなき救いをつげるこの仏さまの仰せと、仏さまの仰せをうなづけないわたしたちの心。どちらがまことで、どちらがいつわりか。もとより勝負はついていました。仏さまの仰せこそまことであり、凡夫のなかに真実はないとお聞かせいただくならば、もはや自分の心にたぶらかされはしません。―偽物に力を入れるな―その一言をお坊さんは喜び、明け方帰っていかれたそうです。うなづけても、うなづけなくとも、偽物に用事はなかったのです。

仏さまの真実心をたまわるとは、仏さまのまごころに負けることだと言えるでしょう。努力をかさね、何かに打ち勝つことは、人生においてとても大切です。しかしいつでも大切とは限りません。ときには壮大な眺めに立ちつくし、師友の恩にただ頭がさがり、孫のしぐさに思わず目じりがさがるように、太刀打ちできないものに負ける慶びもあるでしょう。ともにお慈悲に負けて、お聞かせにあずかりましょう。鮮妙和上は仰っています。

「勝とうと思えばこそ力が入る。骨もおれる。いったん敗ける気になれば、力もいらぬ、骨もおれぬ。その心安さは比類がない」